ジマンノモノ、チョウダイシマス。

美月　花音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジマンノモノ、チョウダイシマス。

【Ｎコード】
Ｎ３７０９Ｆ

【作者名】
美月　花音

【あらすじ】
“偽美人”という女を、知っていますか？そいつは、貴方の自慢の物を、根こそぎ奪っていきます。たとえ、その人を殺しても、ね・・・・・。

最近、ある高等学校では、こんな噂がある。

――周りから可愛い、綺麗だと噂されてる女の子のところに、満月の夜”偽美人（いつわりのびじん）”と名乗るとても綺麗な女の人が来て、その人の一番自慢しているものを、もってっちゃうんだってさ――

偽美人。

偽美人は、満月の夜に可愛い女の子を狙う。狙うものは決まって、『自慢のもの』だ。

ある女の子は高い”自慢の”鼻を。ある子はすらっと伸びた“自慢の”足を。そしてある子は“自慢の”長くてサラサラした、髪の毛を――――。

偽美人は必ず、狙ったものは、根こそぎ持っていく。だから、狙われたら最期、死んでも逃げることはできない。

そうして今日、また新たな犠牲者が出る――――。

彼女の名は現役高校生モデル・高居美野里（たかいみのり）。優しくて綺麗な、誰もがうらやむ女子高生。彼女もまた、自慢するものがあった。

それは、“優しい心”である。

自分で思うのもなんだが、彼女は自分の優しい心を、何よりも自慢に思っている。いわゆる“ナルシスト”であった。
その彼女も、偽美人の噂を知っていたが、まったく信じてはいなかった。

そんなある日。美野里は、急にマネージャーに呼び出された。
「美野里、今日は夜の撮影なのだけれども、大丈夫かしら？」
「大丈夫です！！」
「そう、じゃあ今日の九時に、×〇スタジオにきてくれるかしら。」
「はい、わかりました！！」
この日、偽美人が動き出す・・・・・・・。
「美野里ちゃん、いいよ～！！もうちょっと、手を左に！！」
「は、はい！こう・・・ですかあ？」
「うん、いいよいいよ！！」
・・・・こんな具合に、撮影は進んでいった。

そして、すべての撮影を終えたのは、深夜十一時五十分ごろだった。

カツーン、カツーン。

夜の道路に、美野里の足跡が響く。

『うう、寒いし暗いし、マジで最悪。早く家帰ろう・・・・。』

その時だった。

カツーン、カツーン。『カツカツカツカツ』

カツーン、カツーン、カツン。『カツカツカツカツ、カン』

後ろから、足音がする。

『何、何なの!?・・・・落ち着け美野里。偽美人なんかいないのよ!!ただのストーカーよ!!・・・』

こう思った美野里は、歩く速度を速めた。

カツンカツンカツンカツンカツン!!『カツカツカツカツカツカツカツカツカツ!!!』

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン!!『カツンカツンカツンカツンカツン!!』

カツカツカツカツカツカツカツカツ!!『カカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ!!』

カツカツカツカツカツカツカツカツカツカツカツカツカツカツカツカツカツ！！『カカカかカカカかカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ！！！』

「い、いやぁぁぁぁぁぁ！！！」

もう我慢の限界だ。美野里は一目散に駆け出した。

カッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカ！！『カカカカッカかカカッカッカカカカカ！！！』

カッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカっカッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカッカ！！『カカカカカカッカカカカカカッカカカカカカカカッカカカカかカカカかカカカカカカ！！』

走っても走っても足音はついてくる。美野里は意を決し、振り向いた。と、そこには、“美野里が一番信じたくない人物”がいた。

「あなたは・・・・！？」

「ワタシハ、偽美人。アナタノ自慢のものヲモライニキタノヨ」

「あなたが、偽美人！？『いないと思っていたのに・・・・！！よりによってこんな！！』何をしにきたの！？」

「ダカライッタデショ。ワタシハオマエの“ジマンノモノ”をモライニキタノヨ」

「自慢のもの・・・・！？私はそんなものないわ！！」

美野里は、『とぼけてみたら諦めるかしら――――！？』と考えて、そう言ってみた。

「トボケテモムダヨ。オマエのジマンノモノハ、“優しい心”デショ？」

「何で知ってるの――――！？」

美野里は、偽美人から発せられた言葉を聞いて、焦った。

『こいつが知っているならば、他の人にも知られているかもしれない。そしたら私の、私のモデルとしての人気と信用が――――！！』

その心のうちを知ってか知らずか、偽美人は軽く微笑み、こう言った。

「安心シテ。コノコトハ誰モ知ラナイカラ」

美野里はその言葉を聞いてホッと肩を撫で下ろした。しかし、次の言葉によって、美野里の心に恐怖が宿る。

「サテト、無駄話モコレクライニシテ、ソロソロアナタノ“ジマン

ノモノ”頂戴シテモイイカシラ？」

「え・・・・・？」

すると偽美人は、冷たく微笑みながらこう言った。

「アナタノ”優しい心”、ドウヤッテ頂戴ショウカシラ？心ハ心臓と一緒ダシ、ソレナラ心臓ヲザックリと――――」

「し、心臓――――？」

美野里は怯えながら、ゆっくりと後ずさりする。

それを、偽美人は冷たい微笑みを浮かべながらおいかける。

「エエ、ダッテ”心”ッテイウモノハ、存在シナインダシ、タトエルナラ心臓デショ？」

「え、そんな理屈とおらな――――」

「ヨシ、キマリ。心臓をモライウケルワ。カクゴシテネ、美野里サン？」

いつのまにか、偽美人の手には大きい銀色の鎌が握られていた。

「サヨウナラ」

「え、ちょ、まって――――」

「――――――ぁぁ！？うがっ・・・・・」

偽美人は美野里の心臓めがけて鎌を振り下ろす。心臓は鎌によってえぐりだされ、道路に転がった。偽美人はそれを拾い上げ、穴のあくほど見つめると、やがて満足したのか、ゆっくりと道路の端のほうを振り返る。と、そこに横たわっていたのは――――

美野里だ。

美野里はこの上なく醜い表情をして、道路に倒れていた。偽美人は美野里の心臓を――――今はもう血まみれで何か分からなくなってしまった“それ”を手で軽く握りながら、冷たい笑みで

「フフフ、ヤッパリ優しい心ノモチヌシデモ、シンダラミニククナルモノネ。デモセッカクダカラコレハ、私のコレクションニ加えてオキマショウネ」

そう言い残して立ち去った。

血まみれで醜い表情をした美野里をその場に遺して。

その次の日、美野里の死がニュースとして報道されたのは言うまでもない。

貴方には、自慢できるものがありますか？

誰だって、あると思います。
しかし、それを自慢しすぎるのは良くありません。
どこかで、偽美人が聞いているかもしれませんからね。

今日も、偽美人は獲物を求めて、いろんな町を彷徨っています。

偽美人の餌食になったら、もう貴方は最期の時。

次の偽美人の餌食になるのは、もしかしたら、貴方かもね・・・・・・
――――――？

◆満月の夜に。

◆とても綺麗な女の人と、その手に持っている銀色の鎌を見たら。

◆何も考えずにその場を立ち去ることを、お勧めいたします――――。

（後書き）

はじめての短編＆ホラーです！！

お楽しみいただけたでしょうか？

今の作者ではこんなへなちょこホラーしか書けませんが、よろしくお願いいたします！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3709f/

ジマンノモノ、チョウダイシマス。

2010年10月28日08時33分発行